

ロシアは新たな経済大国となるか? -- 展望と課題 (特集 国際シンポジウム -- 躍進するBRICs 虚像と 実像)

著者	Evgeny Yasin
権利	Copyrights 日本貿易振興機構(ジェトロ)アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	140
ページ	16-17
発行年	2007-05
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00005242

ロシアは新たな経済大国となるか？—展望と課題

エフゲニー・ヤーシン

●好調なロシア経済

近年、ロシア経済の成長力に対する評価が高まっているが、その背景にはここ数年、ロシアが良好な経済パフォーマンスを達成してきたという事実がある。とりわけ二〇〇六年は、ロシア経済にとって良き一年となった。GDP成長率(推定値)が約七%と高水準であった一方、インフレ率は一九九二年以来はじめて一桁台(九%)にまで低下した。貧困層の占める比率も一九九〇年代末と比べて大きく低下した。生産性の指標も順調に伸びている。さらに、二〇〇六年の直接投資の受入額は、過去最高の規模に達するものとみられる。

このような好調な経済パフォーマンスの背後には、ロシアの主要輸出品である天然資源の価格の上昇があるが、これはまたロシアが推し進めてきた革命的ともいえる経済改革の成果でもある。

●急進的な経済改革の成果

一九九〇年代のロシアの急進的な経済改革については、失敗に終わったものとする

見方がある。確かにこの改革は多大な困難を伴うものであった。しかし私は、この改革は大きな成果をもたらしたと考える。最も重要な点として、ソビエト経済期の慢性的な特徴であったモノ(原料)不足が、経済改革の開始直後から解消に向かったことがあげられる。

また改革の結果、投資の枠組みが変化し、投資の生産性が改善したことも指摘したい。一九八五〜一九九〇年と一九九一〜二〇〇三年の二つの時期を比較すると、後者の時期のほうがGDPに対する固定資本形成の比率は低い。投資が一%増加した際のGDPの増分は、前期の〇・五一%から〇・六七%へと上昇した。このような投資の効果の改善は、ロシア経済にとって重要な成果である。また、雇用の産業別シェアも徐々にアメリカの構造に近いパターンへと変化してきている。

ロシアの経済改革は確かに大きな痛みを伴うものであった。しかし、この改革を通じて真の市場経済が誕生したことが、その後の経済発展へとつながったのである。

●成長の牽引車としての輸出

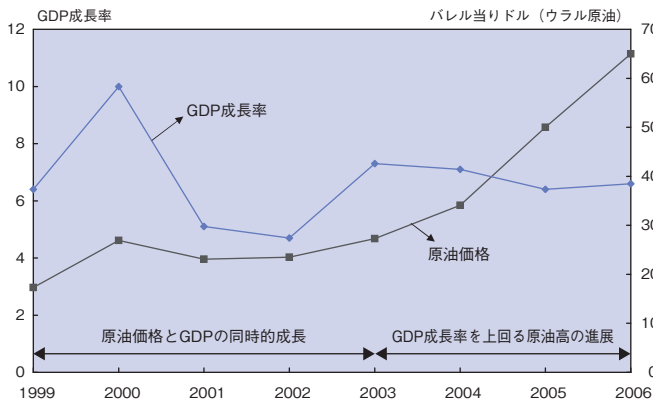
ロシア経済の成長に果たす輸出の役割は大きい。輸出の主力製品は、原油・ガス等の天然資源および鉄鋼・非鉄金属等である。ロシアは今後も豊富な天然資源というメリットを経済発展に活かしていくべきである。ただし、ここ二〜三年は、原油価格の上昇とGDPの急速な成長が同時に起きた以前の局面とはやや異なり、資源価格の上昇のペースほどにはGDPが成長していない(図1)。これは、ロシアがこれまでの「石油ゲーム」から抜け出して次のステップへと歩を進めるべき時期にきていることを意味している。

他方、金融面に目を転じると、一九九八年の経済危機の後、インフレ率が低下してきていることが注目される。ロシアのM2/GDP比率は他の先進国に比べて低水準で推移してきたが、近年は、生産活動の活性化と通貨供給の伸び、インフレの安定化が同時に起きている。



エフゲニー・ヤーシン氏

図1 GDP成長率と原油価格



●ロシア経済の近代化と発展に向けた二つのシナリオ

ロシアの政治は、二〇〇三年前後に曲がり角を迎えた。この年、ユコスをめぐる事件が起き、二〇〇四年頃からは国家セクターの強大化や民主主義を抑えつけるような法律の制定といった動きが生じた。この背景には、オリガーキーとの戦いや、国益に関わる戦略的セクターに対する政府管理の強化、近代化の加速の試みといった動きが挙げられる。

ロシアの近代化のシナリオとしては、民間企業がイニシアティブをとる「下からの近代化」の道と、国家が主導的な役割を果たす

たす「上からの近代化」の道という二つの道筋が考えられる。一九九〇年代から二〇〇三年頃までは、「下からの近代化」の側面が強かった時期である。一方、二〇〇三年以降は「上からの近代化」の色彩が強まっており、国家がビジネスに圧力をかけるようになってきている。しかし、ロシア経済の将来のためには、この二つのパターンの近代化がともに必要である。民間の役割も政府の役割もともに重要なのである。

また、現実の発展プロセスは必ずしも「上から」、「下から」のいずれかに割り切れるものでもない。時期によってどちらの側面がより強く現れているかの違いであるともいえる。

●中国・インドとの比較

ここで、労働資源・天然資源・資本・制度・文化といった成長の要因に注目しながら、ロシアと中国・インドを比較してみよう。中国・インドは安価な労働力の賦存という面で優位性を有する。これに対してロシアは労働力のボトルネックに直面しつつあり、この点で不利な立場にある。人的資本の充実がロシアの政策課題である。

天然資源の賦存という面ではロシアは優位性を有し、今後はこれをさらに活用していくべきである。資金面では、ロシアは豊富な資源に恵まれており、国際収支上の制約には特段直面していない。ただし、資金の有効な活用は、労働力の供給面での制約

と経済活動の水準に規定されるであろう。総じてロシアは、外国からの技術導入や安価な労働力に依拠して工業化を推進するキャッチアップ型の成長モデルからさらなる利益を引き出すことが難しい状況に立っている。

●おわりに—ロシアの課題

ロシアの経済は近代化を必要としている。しかしロシアはすでに工業化を経験した経済社会であり、キャッチアップ型の発展段階から、イノベーションに重きを置くべき段階へと移行している。

ロシア経済のさらなる近代化は、単に投資を増やすだけでは実現できない。これからのロシアに必要なのは、制度・文化・価値観といった面での変革である。そして、この面でロシアはBRICs諸国の中でも有利な立場にあると考える。

ふたたび「下から」と「上から」の近代化という二つの経路のシナリオに即して言えば、現在のロシアがより必要としているのは、「下からの近代化」の道である。しかし、国家の役割もまた依然として大きい。ロシアの経済発展のためにはさらなる改革が必要であり、政府はその担い手として今後も重要な役割を果たしていくことが望まれている。

(Evgeny Yasin / ロシア国際経済大学院
アカデミック・スーパバイザー、前
経済相)